

論文「羅生門」の構造論文集

「羅生門」の主人公「下人」は物語の中で子供から大人へと成長した。その過程を三点説明する。一点目は「にきび」、二

点目は「勇気」、三點目は「逆転」である。

一点目の「にきび」について説明する。下人のほおにはにきびがある。冒頭部、それをいじりながら盗人になるべきなのかといふ迷いがあつた。「にきび」は幼いことの表れである。また、迷つているということは、考えがまとまつていないという判断力のない子供のような下人の状態を表している。

二点目の「勇気」について説明する。下人は生きていくために盗人になる勇気がなかつた。それは罪悪感が盗人になる勇氣を邪魔していたのである。生きいくことと罪悪感では、罪悪感が勝つてしまい、自分のことは自分で判断し、実行できる大人にまだなりきれない下人の幼さを表している。

三点目の「逆転」について説明する。

78 頁6行目「そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、かみ付くようにこう言つた。」の部分で下人は大人になつたことがわかる。なぜその時点なんかというと、冒頭部ではにきびを気にしていて幼い様子だつたが、この場面ではにきびから手を離したので下人が大人になつたことがわかる。他には、考へてゐるだけで実行に移せなかつたが、この場面では老婆の襟髪をつかむことができたことからわかる。77頁14行目「しかし、これを聞いていふうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。」の部分では、勇気が生まれてきたところは大人になろうとしていることはわかるが、実行に移していないので完全に大人になれているわけではないので「逆転」したとは言えない。そうして下人は頭の中で考へてゐるだけで罪悪感から行動に

移せない子供から、罪悪感にとらわれない

で行動できる大人へと成長したのである。

「羅生門」の主人公「下人」は物語の中で子供から大人へと成長した。その過程を三点説明する。一点目は「にきび」、二

点目は「勇気」、三點目は「逆転」である。

一点目の「にきび」について説明する。下人のほおにはにきびがある。冒頭部、それをいじりながら飢え死にするか盗人になつてでも生きるかといふ迷いがあつた。「にきび」は幼いことの表れである。また、迷つているということは、考えがまとまつていないというとりとめもない下人の状態を表している。

二点目の「勇気」について説明する。下人は生きるために盗人になる勇氣がなかつた。それ把握に対する憎悪が盗人になる勇氣を邪魔していたのである。生きることと悪に対する憎悪では、悪に対する憎悪が勝つてしまい、ただ悪が悪いと決めつけ、善悪の眞の意味が理解できず大人にまだなりきれない下人の幼さを表している。

三点目の「逆転」について説明する。

78 頁6行目「そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、かみ付くようにこう言つた。」の部分で下人は大人になつたことがわかる。なぜその時点なんかというと、冒頭部ではにきびを気にしていて幼い様子だつたが、この場面ではにき

びから手を離したので下人が大人になつたことがわかる。他には、考へてゐるだけで実行に移せなかつたが、この場面では老婆の襟髪をつかむことができたことからわかる。77頁14行目「しかし、これを聞いていふうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。」の部分では、勇気が生まれてきたところは大人になろうとしていることはわかるが、実行に移していないので完全に大人になれているわけではないので「逆転」したとは言えない。そうして下人は頭の中で考へてゐるだけで罪悪感から行動に

下人のほおにはにきびがある。冒頭部、それをいじりながら盗人になるか飢え死にをするかという迷いがあった。「にきび」は幼いことの表れである。また、迷つているということは、考えがまとまつていないと、いう優柔不斷な下人の状態を表している。

二点目の「勇気」について説明する。下人は飢え死にならないために盗人になる勇気がなかつた。それは善意が盗人になる勇気を邪魔していたのである。飢え死にならぬことと善意では、善意が勝つてしまい、自分の考えがよいと考えたら積極的に行動できず、大人にまだなりきれない下人の幼さを表している。

三点目に「逆転」について説明する。
78
頁6行目「そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、かみ付くようにこう言った。」の部分で下人は大人になつたことがわかる。なぜその時点なんかというと、下人は最初自分が生きるためにしなければいけないことがわかつていても行動できなかつたが、老婆の話を聞いて行動に移したから。そうして下人は生きるために手段を選ばないと考えても肯定できない子供から、生きるために盗人になる大人へと成長したのである。

一点目の「にきび」について説明する。下人のほおにはにきびがある。冒頭部、それをいじりながら盗人になるという迷いがあつた。「にきび」は幼いことの表れである。また、迷つているということは考えがまとまつていないと、いう不安な下人の状態を表している。

二点目の「勇気」について説明する。下人は生きるために盗人になる勇気がなかつた。それは不安が盗人になる勇気を邪魔していたのである。生きることと不安では、不安が勝つてしまい、生きるために何をすればいいのかわからない下人の、大人にまだなりきれていない幼さを表している。

「羅生門」の主人公「下人」は物語の中で子供から大人へと成長した。その過程を三点説明する。一点目は「にきび」、二点目は「勇気」、三点目は「逆転」である。

一点目の「にきび」について説明する。下人のほおにはにきびがある。冒頭部、それをいじりながら盗人になるという迷いがあつた。「にきび」は幼いことの表れである。また、迷つているということは考えがまとまつていないと、いう不安な下人の状態を表している。

二点目の「勇気」について説明する。下人は生きるために盗人になる勇気がなかつた。それは不安が盗人になる勇気を邪魔していたのである。生きることと不安では、不安が勝つてしまい、生きるために何をすればいいのかわからない下人の、大人にまだなりきれていない幼さを表している。

二点目の「勇気」について説明する。下人は生きるために盗人になる勇気がなかつた。それは不安が盗人になる勇気を邪魔していたのである。生きることと不安では、不安が勝つてしまい、生きるために何をすればいいのかわからない下人の、大人にまだなりきれていない幼さを表している。

二点目の「勇気」について説明する。下人は生きるために盗人になる勇気がなかつた。それは不安が盗人になる勇気を邪魔していたのである。生きることと不安では、不安が勝つてしまい、生きるために何をすればいいのかわからない下人の、大人にまだなりきれていない幼さを表している。

「羅生門」の主人公「下人」は物語の中で子供から大人へと成長した。その過程を三点説明する。一点目は「にきび」、二点目は「勇気」、三点目は「逆転」である。
78
頁6行目「そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、かみ付くようにこう言った。」の部分での部分で下人は大人になつたことがわかる。なぜその時点などとを表す。そして下人は不安や迷いのあらざる子供から、不安のない自分で考えて行動できる大人へと成長したのである。